

明曠『天台菩薩戒疏』「教摂」における化法の四教 ——智顗『菩薩戒義疏』「階位」との比較を中心に——

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

大 津 健 一

Ken'ichi Ohtsu

<要約>

『梵網經』の注釈書である智顗『菩薩戒義疏』（智顗疏）の「階位」と、その智顗疏を受けて著されている明曠の『天台菩薩戒疏』（明曠疏）の「教摂」は、化法の四教を論じている点において共通している。しかし両疏を比較・検討すれば明曠疏の「教摂」は智顗疏を継承していないことが明らかとなる。明曠疏は特に、仏意を明らかにした『法華經』に基づき、円教によって『梵網經』を注釈するという態度を表明していることに特徴が見られる。また比較を通して明らかになった、智顗疏と異なる明曠疏の説は、おおむね智顗や湛然の諸著作に基づいているものである。一方、智顗疏の階位説は大半が『法華文句』や『法華玄義』の依用であり、一部において淨影寺慧遠の説も参照している。以上のような両疏の差異は、同じく化法の四教を論じていても、智顗疏は階位、明曠疏は教判という関心の相違によって生じたものと考えられよう。

I. はじめに

中国天台の『梵網經』の注釈において、智顗（538-597）説とされてきた¹『菩薩戒義疏』（以下、智顗疏）は三重玄義²、明曠（?-777-?）『天台菩薩戒疏』（777年。以下、明曠疏）は七門分別³を立てるという差異が存在するものの、両疏は一部に関係する項目がある。その一つが藏・通・別・円の化法の四教を論じる智顗疏の「階位」と明曠疏の「教摂」である⁴。智顗の諸著作は『梵網經』について、華嚴の教えを結ぶものであり⁵、円教・別教の菩薩戒であると解しており⁶、智顗の説を根本に注釈すると表明している⁷明曠疏も同じ理解に立つ⁸。その上で注釈態度においては、明曠疏は智顗疏よりも大乘

¹ 智顗説という事実は久しく疑義が呈されており、村上 2017 は智顗没後の 664 年から 686 年の間の成立と推定している。

² 釈名・出体・料簡。

³ 名体・宗用・教摂・受法・伝訳・料簡・随文解釈。

⁴ 大津 2020 において三重玄義と七門分別の対応関係を検討した。智顗疏が化法の四教をまとめて論じるのは三重玄義「釈名」の中にある「階位」においてである。智顗が經典注釈に常用する五重玄義（釈名・弁体・明宗・論用・判教）を三重玄義に対応させるなら、「判教」が三重玄義の「階位」に相当するといえよう。一方、五重玄義を内包した明曠疏の七門分別は、「教摂」において化法の四教を論じており、「判教」に相当するといえよう。

⁵ 『法華文句』卷第九下、「梵網經結成華嚴教」（T34, 128a22-23）。

⁶ 『法華玄義』卷第三下、「開僊顗妙者、他云、梵網是菩薩戒。今問、是何等菩薩戒。彼若答言是藏通等菩薩戒者、応別有菩薩衆。衆既不別、戒何得異。又若別明菩薩戒、何等別是緣覺戒。今明三藏三乘無別衆、不得別有菩薩緣覺之戒也。若作別円菩薩解者、可然。何者。三乘共衆外、別有菩薩、故別有戒」（T33, 717c23-718a1）。

⁷ 明曠疏卷上、「今随所欲、直筆銷文、取捨有憑、不違先見。則以天台為宗骨、用天宮之具緣」（T40, 580b11-12）。

⁸ 明曠疏卷上、「於是別円大士之所同修」（T40, 580b20-21）。

や円教の立場を鮮明にしている⁹。よって、両疏における化法の四教に関する説を検討することによって明曠疏の特徴がより明らかになると考えられる。こうした問題意識のもと本論は、智顗疏と明曠疏を比較する基礎研究として、智顗疏「階位」と明曠疏「教摂」を取り上げ、両疏の差異を検討する。

II. 智顗疏「階位」と明曠疏「教摂」の比較

1. 四教について

化法の四教を論じるに当たり、智顗疏「階位」と明曠疏「教摂」の冒頭部分を対照すると下記の通りである。智顗疏は『法華文句』や『観音玄義』との本文の一致が明らかであり¹⁰、その文も合わせて挙げる（下線のうち傍線部は智顗疏と『法華文句』、点線部は智顗疏と『観音玄義』との一致を示す）。

智顗疏卷上 (T40, 563c26-564a8)	明曠疏卷上 (T40, 581b1-3)
<p>次明階位。釈尊一化所説教門、準義推尋具明四教。謂藏通別円。</p> <p>如大論引迦旃延明六度齊限、尸毘代鵠是檀滿、須摩提王不妄語是尸滿、忍辱仙人歌利王割其心不動是忍滿、大施杼海是進滿、尚闍梨鳥巢是禪滿、劬嬪大臣分地息諍是等智滿、偏菩薩也。</p> <p>大品明、有菩薩、發心与薩婆若相應、通菩薩也。</p> <p>有菩薩、發心遊戲神通、淨仏国土、淨名中、不思議解脫、変身登座、而復受屈被呵者、別菩薩也。</p> <p>發心即坐道場成正覺、転法輪度衆生、円菩薩也。</p> <p>四菩薩中、行位深淺、今当説。</p>	<p>三明教摂者、釈尊一化、示身説法、有始有終、四種差別。謂三藏教、通教、別教、円教。</p>

『法華文句』卷第二上 (T34, 20c21-21a5)
<p>菩薩多種。謂偏通別円。如釈論引迦旃延子明六度齊限而滿者、此欲調血衆生為乳也。若大品明、有菩薩、發心与薩婆若相應者、此欲調乳入酪也。若大品明、有菩薩、發心遊戲神通、淨仏国土、又如淨名中、得不思議解脫者、皆能変身登座、而復受屈被呵者、此欲調酪為生熟蘇也。若大品明、有菩薩、發心即坐道場成正覺、転法輪度衆生者、此是調蘇為醍醐也。……故略有四種也。</p>

『観音玄義』卷下 (T34, 885b26-29)
<p>行此六度各論時節。尸毘代鵠是檀滿。須摩提不妄語是尸滿。歌利王割截不動是忍滿。大施杼海是精進滿。尚闍梨坐禪是定滿。劬嬪大臣分地是般若滿。</p>

智顗疏は四教それぞれの菩薩を論じ、以後においてその行位を明らかにすると述べている。智顗疏が依用したと考えられる『法華文句』の文は、菩薩衆を挙げる内容であり、「偏（藏）通別円」の菩薩について五味によって説明する。しかし智顗疏は五味の説は受容していない。なお智顗疏全体として

⁹ 大津 2020 において、智顗疏と明曠疏の釈名段を比較・検討した。

¹⁰ 村上 (2009, 790-791)、同 (2017, 111-112) は、この『法華文句』と『観音玄義』の依用を例示し、智顗没後に現行本が成立した三大部等を参照しているため智顗疏は没後の成立であると述べている（注1を参照）。

有証法之信、必知作仏。而用煥解、修行六度、心未分明。故口不向他説也。從然灯仏至毘婆尸仏時、名第三阿僧祇劫。是時内心了了自知作仏、口自發言、無所畏難。準此位、応在頂法位中。修行六度、四諦解明、如登山頂、了見四方。故口向他説也。若過三僧祇劫、種三十二相業者、準此是下忍之位。用此忍智、行六度、成百福德、用百福、成一相因。於下忍之位、人中仏出世時得種也。若坐道場時、位在中忍、上忍。從上忍一剎那入真、三十四心斷結、得阿耨三菩提、則名為仏。爾前則是三藏菩薩、上草之位也。

智顗疏は、声聞については七賢七聖を列举するのみである。菩薩について依用した『法華玄義』の内容は、『法華経』の三草二木の譬喩を通して位を述べ、そのうち上草の位として蔵教の菩薩を論じたものである。菩薩が三阿僧祇劫を経て覺りを得る過程を示している。智顗疏は、その『法華玄義』の文に六波羅蜜の内容を加えているが、その付加自体も『法華玄義』の別の箇所において「六度菩薩」（蔵教の菩薩）の利益を述べた文¹³に依っていると考えられる。ここにおいても智顗疏としての独自の説はほぼ見られないといえよう。

明曠疏は、声聞の七賢七聖を個別に論じておらず、智顗疏のような階位への関心が見られない。また智顗疏が触れていない縁覺について、仏と出会うか否かの差異があると述べている。智顗疏が縁覺に言及しないのは、依用する『法華玄義』に中草の位として辟支仏（縁覺）位を明らかにする内容¹⁴があるものの、声聞のような段階的な果を制定しないと述べており、はっきりした階位が示されていないためとも考えられる。そして、明曠疏は、菩薩は声聞と毘尼（律）・毘曇（論）・修多羅（經）が同じであること、僧伽の布薩を共に行い、別の菩薩律儀がないことを示しており、布薩や菩薩律儀といった修行実践への関心が明らかになっている。さらに仏の相を具体的に示す点も智顗疏と異なり、その表現は『法華文句』¹⁵との関連を指摘できる。

3. 通教

通教においては智顗疏・明曠疏ともに、共の十地を論じている。智顗疏は『法華玄義』との本文的一致が明らかである¹⁶。

智顗疏卷上 (T40, 564b2-27)	明曠疏卷上 (T40, 581b11-19)
通教菩薩、即三乘共十地。	二 ¹⁷ 通教者、如方等般若明三乘人共行十地。

¹³ 『法華玄義』卷第六下、「五番六度菩薩、觀於四諦、行六度行。若行檀時、人從乞頭、索眼国城妻子、心或輒動、檀度不成。自知是惡、欲成檀善、可發閑宜之機、蒙三昧力、伏其慳蔽。是破餓鬼有。蔽心既去、歡喜布施、如飲甘露。知有為法危脆無常、是蒙心樂三昧冥顯之益也。尸羅若成、是伏毀戒蔽、破地獄有。は無垢三昧益也。忍成、伏瞋蔽、破畜生有。不退三昧益也。禪成、是伏亂蔽、破人有。是四三昧益也。精進成、伏懈怠蔽、破脩羅有。歡喜三昧益也。慧成、伏愚痴蔽、破天有。十七三昧益也。六蔽是六道業。具出菩薩戒本」(T33, 760b3-15)。

¹⁴ 『法華玄義』卷第四下、「二明辟支仏位者、此翻縁覺。……此人根利、不須制果、能斷正使、又加侵習。譬如身壯、直到所在、不中止息。故不制果。是名中草位竟」(T33, 729b7-22)。

¹⁵ 『法華文句』卷第一上、「仏名覺者知者、於道場樹下、知覺世間出世間總相別相。覺世即苦集、覺出世即道滅。亦能覺他。身長丈六、寿八十、老比丘像、菩提樹下、三十四心正習俱尽者、即三藏仏自覺覺他」(T34, 4c19-23)。

¹⁶ 『四教義』卷第八 (T46, 748b9-750b22) や『維摩経玄疏』卷第三 (T38, 537b12-538a2) と関連する。

¹⁷ 大正蔵は「三」とするが、諸刊本 (大津 2019) や『会本』により「二」に改める。

<p><u>一乾慧地者、事相名同三藏、觀行心別。体陰界入如幻如化、総破見愛八倒、名身念処。心受法亦如是。住是觀中、修正勤如意根力覺道。雖未得暖法相似理水、総相智慧深利、故称乾慧地。</u></p> <p><u>二性地者、得過乾慧地。得暖法已、能增進初中後心、入頂法乃至世第一法、皆名性地。得無漏性水、故言性地也。</u></p> <p><u>三八人地、三乘信行法行、体見仮、発真断惑、在無間三昧中、八忍具足、智少一分、名八人地也。</u></p> <p><u>四見地者、三乘同見第一義無生四諦之理、同断見惑八十八使尽。</u></p> <p><u>五薄地、体愛仮発真、断欲界思、証第六解脱、煩惱薄也。</u></p> <p><u>六離欲地者、三乘体愛仮即真、断欲界五下分結身見戒取疑貪瞋、故言離欲地也。</u></p> <p><u>七已辦地者、三乘之人、体色無色愛即真、発無漏、断五上分結掉慢疑色染無色染、七十二尽、三界事惑究竟、故言已辦地也。</u></p> <p><u>八辟支仏地、縁覺発真無漏、功德力大、能除習氣也。</u></p> <p><u>九菩薩地者、從空入仮、道觀双流。深觀二諦、進断習氣色心無知、得法眼道種智、遊戲神通、淨仏国土、成就衆生。学仏十力四無畏、断習氣将尽也。</u></p> <p><u>十仏地者、大功德力、以資智慧、一念相應慧觀真諦究竟、習亦無余、如劫火烧木無復灰炭、香象渡河到於辺底。</u></p> <p><u>雖仏菩薩名異二乘、通觀無生体法。同は無学。共帰灰断。証果処一、称为通也。</u></p>	<p>一乾慧地〔外凡〕。</p> <p>二性地〔内凡〕。</p> <p>三八人地。</p> <p>四見地〔不出觀共断見惑。与三藏初果齊〕。</p> <p>五薄地〔三人同断欲界六品思惑。与三藏二果齊〕。</p> <p>六離欲地〔断欲界九品思惑。与三藏三果齊〕。</p> <p>七已辦地〔断三界見思尽。与三藏羅漢齊〕。</p> <p>八支仏地〔福德深利、能侵習也〕。</p> <p>九菩薩地〔從空出仮、侵小習氣、及界内無知。学仏十力等法〕。</p> <p>十仏地〔一念相應、習氣永尽。与三藏仏齊也〕。</p> <p>此等十地、前無住行向名、後無等覺妙覺位。三人因果大同、名為通教。示勝応身、魏魏堂堂如星中月、即通仏相也。菩薩亦同声聞律儀。</p>
---	---

<p>『法華玄義』卷第四下 (T33, 729c18-730a21)</p> <p>先明<u>三乘共十地位</u>、次簡名別義通〔云云〕。<u>一乾慧地者</u>、三乘之初、同名乾慧。即是体法五停心別相総相四念処觀。<u>事相不異三藏</u>。此三階法門、<u>体陰入界如幻如化、総破見愛八倒、名身念処。受心法亦如是。住是觀中、修正勤如意根力覺道。雖未得暖法相似理水、而総相智慧深利、故称乾慧位也。</u><u>二性地位者、得過乾慧。得暖已、能增進初中後心、入頂法乃至世第一法、皆名性地。性地中無生方便解慧善巧、転勝於前、得相似無漏性水、故言性地也。</u><u>三八人地位者、即是三乘信行法行二人、体見仮、以発真断惑、在無間三昧中、八忍具足、智少一分、故名八人位也。</u><u>四見地位者、即是三乘同見第一義無生四諦之理、同断見惑八十八使尽也。</u><u>五薄地位者、体愛仮即真、発六品無礙、断欲界六品、証第六解脱、欲界煩惱薄也。</u><u>六離欲地位者、即是三乘之人、体愛仮即真、断欲界五下分</u></p>

結尽、離欲界煩惱也。七已辦地位者、即是三乘之人、体色無色愛即真、發真無漏、断五上分結七十二品尽也。断三界事惑究竟、故言已辦地。八辟支仏地位者、縁覺菩薩發真無漏、功德力大、故能侵除習氣也。九菩薩地位者、從空入仮、道觀双流。深觀二諦、進断習氣色心無知、得法眼道種智、遊戲神通、淨仏国土、成就衆生。学仏十力四無所畏、断習氣将尽也。齊此名小樹位也。十仏地者、大功德力資智慧、一念相應慧觀真諦究竟、習亦究竟。如劫火烧木無復炭灰、如象渡河到於辺底。雖菩薩仏名異二乘、通俱觀無生体法。同是無学。得二涅槃、共帰灰断。証果処一、故稱為通也。

『法華玄義』は三草二木のうち小樹に当たる通教の位として共の十地を述べた内容であり、智顗疏の文はほぼ『法華玄義』に依っている。智顗疏のみに見られる表現は主に「身見戒取疑貪瞋」や「掉慢疑色染無色染」であるが、それぞれ五下分結や五上分結の内容を列挙して補ったものであり、智顗疏の独自の説は見られない。

一方の明曠疏は、共の十地を示すものの極めて簡略な説明である。乾慧地・性地を外凡・内凡とし、後の位を三蔵の四果と対応させる解釈は智顗の諸著作にあるが、支仏地の「福德深利」などの表現に着目すれば『摩訶止観』¹⁸に近いといえよう。仏の相を表した「魏魏堂堂如星中月」も『摩訶止観』¹⁹と関連する。また蔵教と同じく、ここにおいても菩薩は声聞と同じ律儀であることを述べている。

4. 別教

両疏ともに五十二位を挙げており、智顗疏は『法華玄義』との関連が指摘できる²⁰。

智顗疏卷上 (T40, 564b28-c16)	明曠疏卷上 (T40, 581b19-27)
別教階位五十二地。	三別教者、如瓔珞仁王等經明五十二位。地前属凡名賢。登地属聖。或云、七地入無功用。
一外凡十信。一信。二念。三進。四慧。五定。六不退。七廻向。八護法。九界。十願。	十信、数進数退、名為外凡。
第二内凡習種性十住。一發心。二持地。三修行。四生貴。五方便具足。六正心。七不退。八童真。九法王子。十灌頂。尽三十心、皆名解行位、悉是内凡、尽名性地。	十住、入空而断見思、及断界外上品塵沙。
第三性種性十行。一歡喜。二饒益。三無恚恨。四無尽。五離痴乱。六善現。七無著。八尊重。九善法。十真実。	十行、出仮断中品塵沙、遍知四教十界藥病。

¹⁸ 『摩訶止観』卷第六上、「二通家体思三乘共位者……乾慧地、正是三賢位。……通是外凡、故言乾慧地。性者、即是四善根位……通名内凡。……薄者、除欲界思惟六品、故名薄地。離欲者、除欲界九品尽、故言離欲地。已辦者、除色無色七十二品尽、如火烧木為炭、故言已辦地。辟支仏者、福德深利、能侵除習氣、如烧木成灰。菩薩者、福德深利、道觀双流、断習氣及色心無知、得法眼道種智、遊戲神通、淨仏国土、学仏力無畏等法、殘習将尽、如余少灰。仏地者、大功德資力智慧、得一念相應慧、習氣永尽……八人見地是須陀洹。……薄地是斯陀含。……離欲地是阿那含。……已辦地是阿羅漢。……四忍為初地。四智為二地。四比忍為三地。四比智為四地。此四地皆不出観而断見惑。……薄即五地断六品思。離欲即六地断九品思。已辦即七地断色無色思尽」(T46, 71c17-72b21)。

¹⁹ 『摩訶止観』卷第五下、「止観能顯果者、果不自顯、由行故果滿、果滿故一切皆滿。巍巍堂堂、如星中月照十宝山影臨四海」(T46, 59c23-25)。

²⁰ 『四教義』卷第九 (T46, 752c2-16) や『維摩經玄疏』卷第三 (T38, 538c27-540a27) と関連する。

<p>第四道種性十廻向。一救護一切衆生離衆生相。二不壞。三等一切諸仏。四遍至一切処。五無尽功德藏。六随順一切堅固平等善根。七随順等觀一切衆生。八真如相。九無縛無著解脱。十法界無量。</p> <p>第五聖種性十地。一歡喜。二離垢。三明。四焰。五難勝。六現前。七遠行。八不動。九善慧。十法雲。</p> <p>第六等覺地、名金剛心菩薩、亦名無垢地。隣真極聖、衆学之頂也。</p> <p>第七妙覺地、即見性究竟仏菩提果、了了見性、称妙覺也。</p> <p>……</p>	<p>十廻向位、断下品塵沙、向後修中、伏界外²¹無明。一分纔落、即入初地。</p> <p>八相成道。因果迢遼、劫数巨量。觀行歷別、別前別後。故名為別。示成報身、即其相也。</p>
--	--

<p>『法華玄義』卷第四下 (T33, 732a9-22)</p> <p>初十信心即是外凡。亦是別教乾慧地。亦名伏忍位也。十住即是習種性。此去尽三十心、皆解行位、悉是別教内凡。亦是性地。亦名柔順忍位。約別教義推、応如煥法也。十行即是性種性。別教義推、応如頂法。十廻向道種性。別教義推、応如忍法世第一法。……十地即是聖種性。此皆入別教四果聖位、悉斷無明別見思惑。等覺位即是等覺性。若望菩薩、名等覺仏。若望仏地、名金剛心菩薩、亦名無垢地菩薩也。妙覺地即是妙覺性。即是究竟仏菩提果、大涅槃之果果也。</p>
--

『法華玄義』は三草二木の大樹を別教の位に当て、『菩薩瓔珞本業經』(以下、『瓔珞經』)に焦点を合わせた「七位」²²の内容を智顗疏が依用している。この階位説が中国に広まったのは『仁王護国般若經』、『梵網經』、『瓔珞經』の影響とされ²³、習種性・性種性・道種性・聖種性の区分や、十信・十住を凡位とすることは『瓔珞經』に由来する²⁴。十住・十行・十廻向の三十心が内凡であり、十地以降が聖位となる。智顗疏は、五十二位の一つ一つを列挙した上で、七位ごとの説明については『法華玄義』に依っており、独自の説は見られない。

明曠疏は、各位について詳論せず、十住は「入空」、十行は「出仮」、十廻向の後は「修中」として三觀に対応させ、それぞれ断伏できる煩惱を示している。これらは『法華玄義』が『瓔珞經』の階位を論じた後、『大品般若經』と三觀に焦点を合わせて説いている内容²⁵と関連がある。觀心行と断伏できる煩惱を段階的に示している点は、智顗疏が『法華玄義』を依用しつつも「悉斷無明、別見思惑」などの表現は省いていることと対照をなす。また、別教の仏の相を報身と示す一方、藏教・通教とは異なり声聞律儀との関係に言及しない。これは本論の冒頭に述べた通り、別教・円教の菩薩は声聞の律儀とは異なり、『梵網經』を菩薩の律儀とする認識によると考えられる。

²¹ 大正藏は「外界」とするが、『会本』により「界外」に改める。

²² 十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺の七つ。

²³ 水野(1984, 9-19)など。

²⁴ 『瓔珞經』卷上、賢聖学觀品 (T24, 1012b25-c23)。

²⁵ 『法華玄義』卷第四下、「二約大品及三觀合位、明断伏高下者、大品、菩薩欲具道慧、当学般若。即此十信、習從仮入空觀、伏愛見論、欲入十住位。若得十住、即断界内見思也。欲以道慧具足道種慧、当学般若。此即修從空入仮十行也。欲以道種慧具足一切智、当学般若。此即修中道正觀、入十廻向位也。欲以一切智具足一切種智、当学般若。此即是証中道觀、入十地也。欲以一切種智断煩惱習、当学般若。此即等覺地也。無明煩惱習尽、名之為仏。即妙覺地也」(T33, 732a22-b4)。

なお、智顗疏は上記の文に続き、性種性（十行）と習種性（十住）の先後や法才王子の退転に関する諸説などについて論じているが²⁶、明曠疏はそれらの解釈も受容していない。その智顗疏の文の一部には、淨影寺慧遠（523-592）の『大乘義章』と本文的一致が見られる²⁷。

智顗疏卷上（T40, 564c16-27）	『大乘義章』卷第九（T44, 650c27-651a26）
<p><u>性習二性、若擲位分、習種在前、性種在後。若擲行論、性習同時、故前後不定。依体起用、先明性種、後明習種。尋用取体、先習後性。与教証二道相似。就位以論、教道在前、証道在後。擲行論之、証教同時、前後不定。依体起用、先証後教。尋用取体、先教後証也。</u></p> <p>就解行中復有四種。<u>一名解行。二名發心。三名廻向。四名道種。於出世道解而勤行、故名解行。於大菩提起意趣求、故名發心。用己善法趣向菩提、故名廻向。当分之中如觀道立、故名為道。望後仏果能生曰種也。……</u></p>	<p><u>二種性者、一習種性、二性種性。此二種性、若擲位分、習種在前、性種在後。若就行論、性習同時、以同時故、前後不定。依体起用、先明性種、後明習種。尋用取体、先明習種、後明性種。与彼証道教道相似。就位以論、教道在前、証道在後。……擲行論之、証教同時、以同時故、先後不定。依体起用、先証後教。尋用取体、先教後証。……</u></p> <p><u>解行之位名有四別。一名解行。二名發心。三名廻向。四名道種。……於出世道解而行、故名為解行。……於大菩提起意趣求、故名發心。……廻己善法趣向菩提、故名廻向。……当分之中如觀道立、故名為道。望後仏果能生曰種。</u></p>

5. 円教

両疏は円教の冒頭において、次のように述べる。

智顗疏卷上（T40, 565a6-8）	明曠疏卷上（T40, 581b27-c1）
<p>円教明位。別教五十二位次第修行。円教円修一心具万行。異於次第行也。</p>	<p>四円教者、円信三障即是三徳。報障即法身、煩惱即般若、結業即解脱。</p>

智顗疏は、別教が次第行であるのに対し、円教は一心に万行をそなえるという差異を示す。明曠疏は、報障・煩惱・結業の三障が即、法身・般若・解脱の三徳であると完全に信じる（円信）ことによって円教を解する。「円信」は、智顗疏の上記の文に続く内容にも説かれているが、三障と三徳の関係によって論じている点は、『摩訶止観』や明曠の師である湛然（711-782）の『止観輔行伝弘決』（以下、『輔行』）に基づくと考えられる。『摩訶止観』²⁸は「聞円法」、「起円信」、「立円行」等を立て、「聞円法」を「生死即法身、煩惱即般若、結業即解脱と聞く」とし、この三つが一体であり、一切法はすべて仏の教をそなえていると聞くことと述べる。「起円信」は、一切法が即空・即仮・即中であると信

²⁶ 智顗疏卷上（T40, 564c16-565a6）。

²⁷ 村上（2017, 128-130）。

²⁸ 『摩訶止観』卷第一上、「此菩薩、聞円法、起円信、立円行、住円位、以円功德、而自莊嚴、以円力用、建立衆生。云何聞円法。聞生死即法身、煩惱即般若、結業即解脱。雖有三名、而無三体。雖是一体、而立三名。是三即一相。其實無有異。法身究竟、般若解脱亦究竟。般若清浄、余亦清浄。解脱自在、余亦自在。聞一切法亦如是。皆具仏法、無所減少。是名聞円法。云何円信。信一切法即空即仮即中、無一二三、而一二三。無一二三、是遮一二三。而一二三、是照一二三。無遮無照、皆究竟清浄自在。聞深不怖、聞広不疑、聞非深非広、意而有勇。是名円信」（T46, 2a6-18）。

じることとする。『輔行』²⁹は、『摩訶止観』の「円聞」が「三障即是三徳」と聞くのみであることについて、『摩訶止観』の旨帰章が明らかにしていると説く。『摩訶止観』の第十章に当たる旨帰は不説であるが、冒頭の大意に略説され³⁰、そこにおいて三障と三徳の相即を述べている。そして『輔行』は「円信」とは理に依って信を起こすのであり、信は行の本であるとして次の「円行」と結び付ける。明曠疏はこれらのことを踏まえ、三障即三徳を「円信」の内容として取り上げたものと考えられる。

(1) 五品弟子

円教の階位として、五十二位の前に五品弟子位が置かれている。智顗疏は下記の通り『法華玄義』との本文的一致が明らかである。

智顗疏卷上 (T40, 565a8-b7)	明曠疏卷上 (T40, 581c1-4)
<p>外凡五品位。</p> <p>一切随喜心、<u>若人宿植深厚、或值善知識、或從經卷、円聞妙理、一法一切法、一切法一法、非一非一切、不可思議。起円信解。信一心中具十法界、如一微塵有大千經卷。欲開此心、而修円行。円行者、一行一切行。略言為十。謂識一念平等具足不可思議、傷己憊沈、慈及一切。又知此心常寂常照。用寂照心、破一切法、即空即假即中。又識一心諸心、若通若塞。能於此心、具足道品、向菩提路。又解此心正助之法。識己心及凡聖心。又安心不動不墮不退不散。雖識一心無量功德、不生染著。十心成就。其心念念悉与諸波羅蜜相應也。</u></p> <p>二説誦者、<u>円信始生、善須將養。涉事紛動、令道牙破。唯得内修理観、外則説誦大乘。聞有助観之力。内外相藉、円信転明、十心堅固。如日光照見種種色也。</u></p> <p>三説法者、<u>内観転強、外資又著。円解在懐、弘誓重動、更加説法、如実衍布。但以大乘法答。設以方便終令悟大。随説法淨、則智慧淨。説法開導、是前人得道全因縁。化功帰己、十心三倍転明也。</u></p> <p>四兼行六度。<u>上来前熟観心、未遑涉事。今正観稍明、即傍兼利物。能以少施、与虚空等、使一切法趣檀。檀為法界。事相雖少、運懐甚大。理観為正、事行為傍。故言兼行。事福資理、十心弥盛也。</u></p> <p>五正行六度。<u>円観稍熟、事理欲融。事不妨理、理不隔事。具</u></p>	<p>依信起行、三観円修、刹那無間、名初随喜品。</p> <p>第二受持説誦、</p> <p>第三解説書写、</p> <p>第四兼行六度、</p> <p>第五具行六度。</p>

²⁹ 『輔行』卷第一之二、「今略依彼、開為六文、立円因果。何謂円聞。祇聞三障即是三徳。至旨帰章及通徳中、具明其相。言円信者、依理起信。信為行本」(T46, 152b19-21)。

³⁰ 『摩訶止観』卷第二下、「復次、三徳非新非故、而新而故。所以者何。三障障三徳。無明障法身、取相障般若、無知障解脱。三障先有、名之為故。三徳破三障、今始得顕、故名為新。三障即三徳、三徳即三障。三障即三徳、三障非故。三徳即三障、三徳非新。非新而新、則有発心所得之三徳、乃至究竟所得之三徳。非故而故、則有発心所治之三障、乃至究竟所治之三障。新非新、故非故、則有理性之三徳。若総達三徳非新非故、而新而故、無一異相、為他亦然、即是旨帰秘密藏中」(T46, 21a7-17)。

行六度。権実二智、究了通達。治生産業、皆与実相不相違背。 具足解釈仏之知見、而於正觀、如火益薪。力用光猛也。	委如法華。此五品弟子、円伏 無明。即外凡位。
---	---------------------------

『法華玄義』卷第五上 (T33, 733a12-b28)	
<p>今於十信之前、更明五品之位〔云云〕。若人宿殖深厚、或值善知識、或從經卷、円聞妙理。謂一法一切法、一切法一法、非一非一切、不可思議。如前所説、起円信解。信一心中具十法界、如一微塵有大千經卷。欲開此心、而修円行。円行者、一行一切行。略言為十。謂識一念平等具足不可思議、傷已昏沈、慈及一切。又知此心常寂常照。用寂照心、破一切法、即空即假即中。又識一心諸心、若通若塞。能於此心、具足道品、向菩提路。又解此心正助之法。又識己心及凡聖心。又安心不動不墮不退不散。雖識一心無量功德、不生染著。十心成就。舉要言之、其心念念悉与諸波羅蜜相應。是名円教初隨喜品位。行者円信始生、善須將養。若涉事紛動、令道芽破敗。唯得内修理觀、外則受持誦誦大乘經典。聞有助觀之力。内外相藉、円信轉明、十心堅固。金剛般若云、一日三時、以恒河沙身布施、不如受持一句功德。初品觀智如目、次品誦誦如日。日有光故、目見種種色。……聞有巨益、意在於此。是名第二品位。行者内觀轉強、外資又著。円解在懷、弘誓熏動、更加説法、如実演布。安樂行云、但以大乘法答。設以方便隨宜、終令悟大。淨名云、説法淨、則智慧淨。……説法開導、是前人得道全因縁。化功帰己、十心則三倍轉明。是名第三品位。上来前熟觀心、未遑涉事。今正觀稍明、即傍兼利物。能以少施、与虚空法界等、使一切法趣檀。檀為法界。……事相雖少、運懷甚大。此則理觀為正、事行為傍。故言兼行布施。事福資理、則十心弥盛。是名第四品位。行人円觀稍熟、理事欲融、涉事不妨理、在理不隔事。故具行六度。……若修慧時、権実二智、究了通達。乃至世智治生産業、皆与実相不相違背。具足解釈仏之知見、而於正觀、如火益薪。此是第五品位。</p>	

智顗疏は『法華玄義』とほぼ一致し、独自の説は見られない。初隨喜において、一行が一切行である「円行」としてかいつまんで十乘觀法を取り上げ、一つ一つを解釈している。そして、その「十心」が第二品以後に盛んになると述べている。

明曠疏は、前項の「円信」を受け、信によって行を起こし、その行を三觀として完全に修めることを初隨喜とする。また、その後は名称のみを挙げて詳説せず、最後に五品弟子は無明³¹を伏すことができる外凡位と示す。なお第五の位の名を「正行六度」でなく「具行六度」とする点は『摩訶止観』³²と一致する。

(2) 十信

智顗疏は下記の通り『法華玄義』との本文的一致が明らかである³³。

智顗疏卷上 (T40, 565b7-15)	明曠疏卷上 (T40, 581c4-7)
第一内凡十信。円聞円信、修於円行、善巧增益、五倍深明。因此円行、得入円位。善修平等法界、即入信心。善修慈愍、即入念心。善修寂照、即入進心。善修破法、即入慧心。善修通	十信之位、見思先落。故仁王經云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。即内凡位。与別教十

³¹ 五住地惑の第五である無明住地のことと考えられる。『輔行』卷第七之四、「五品已能円伏五住」(T46, 385a21)を参照。

³² 『摩訶止観』卷第六下、「具行六度、事理無減、成第五品」(T46, 85a14)。

³³ 『四教義』卷第十一 (T46, 762b16-c8) と関連する。

塞、即入定心。善修道品、即入不退心。善修正助、即入廻向心。善修凡聖、即入護心。善修不動、即入戒心。善修無著、即入願心。是名円教鉄輪十信位。円教似解六根清浄也。	住及藏通仏齊。
---	---------

『法華玄義』卷第五上 (T33, 733c17-734a2)	
一明十信位者、初以円聞、能起円信、修於円行、善巧増益、令此円行五倍深明。因此円行、得入円位。以善修平等法界、即入信心。善修慈愍、即入念心。善修寂照、即入進心。善修破法、即入慧心。善修通塞、即入定心。善修道品、即入不退心。善修正助、即入廻向心。善修凡聖位、即入護法心。善修不動、即入戒心。善修無著、即入願心。是名入十信位。纓珞云、一信有十、十信有百。百法為一切法之根本也。是名円教鉄輪十信位。即是六根清浄。円教似解……仁王般若云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。亦此位也。	

智顗疏は『法華玄義』とほぼ一致し、独自の説は見られない。五品弟子においては初随喜の位に説かれていた十乗觀法の解釈が、十信においては一つ一つの位に対応する形で述べられている点に特徴がある。

明曠疏は、十信を見思惑がなくなる内凡位とし、別教の十住³⁴ならびに藏教・通教の仏と等しい³⁵と述べる。十信を『仁王般若經』の文によって解釈するのは、智顗疏が依用した『法華玄義』の文に続く箇所や『摩訶止観』等³⁶に見られる。

(3) 十住から妙覺まで

十住から妙覺までは次の通りである。智顗疏は『法華玄義』との本文的一致が明らかである³⁷。

智顗疏卷上 (T40, 565b15-c28)	明曠疏卷上 (T40, 581c7-11)
<p>第二聖位。前明十住真中智也。</p> <p>初發心住発時、三種心発。一縁因善心発。二了因慧心発。三正因理心発。即是境智行妙三種開発。縁因心発、即是住不可思議解脫、首楞嚴定。了因心発、即摩訶般若、畢竟空也。正因發心、即是住実相法身、中道第一義諦也。華嚴云、初住所有功德、三世諸仏歎不能尽。初發心時、便成正覺、了達諸法真実之性。所有聞法、不由他悟。浄名云、知一切法。是坐道場。亦是入不二法門。大品、從初發心即坐道場、轉法輪度衆生。謂如仏。阿字門、一切法初不生也。</p>	<p>十信後心、破於界外一品無明、入初住位、円成八相。如華嚴所辨。与別初地、功用一齊。始終總破四十二品界外無明、方成妙覺。別而不別、妙理無二。故名爲円。上根一生有入初住之義。</p>

³⁴ 『摩訶止観』卷第五下、「若依別教、伏見者是鉄輪十信位、破見是銅輪十住位。若依円教、伏見是五品弟子位、破見是六根清浄位」(T46, 69c1-4)と関連する。

³⁵ 『仁王護国般若經疏』卷第四、「問、与前二教何位齊。答、奪而論之、藏通二教、巧拙雖異、但見於空、不見不空、未識中道。円教十信具修三觀、与前二教不可格量。与而為論、円教十信、藏通仏与二乗俱断見思、即与藏通等仏地齊也」(T33, 273b29-c4)と関連する。

³⁶ 『摩訶止観』卷第七下、「如此次第念進慧定陀羅尼戒護廻向願等十信具足、名六根清浄相似之位。四住已尽。仁王般若云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。即此意也」(T46, 99a22-26)。また『四念処』は「十善菩薩」の十善は十信であると明示する。『四念処』卷第三、「若欲作者、取法華五品弟子、開五品為十、対十信。故仁王云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。十善即十信。十信尚断惑。況十住耶〔云云〕」(T46, 571c13-16)。

³⁷ 『四教義』卷第十一・十二 (T46, 762c27-764c26)、『維摩經玄疏』卷第四 (T38, 541a7-542a10)と関連する。

第三明十行者、即是十住後、実相真明不可思議。更十番智斷破十品無明。一行一切行、念念進趣、流入平等法界海、諸波羅蜜任運生長。自行化他與虛空等也。

第四十廻向者、十行之後、無功用道、不可思議、真明念念開發、一切法界願行事理、自然和融、廻入平等法界海。更証十番智斷、破十品無明、故名廻向也。

第五十地者、即是無漏真明、入無功用道。猶如大地、能生一切佛法、荷負法界衆生、普入三世仏地。又証十番智斷、破十品無明也。

第六等覺地者、觀達無始無明源底、辺際智滿、畢竟清淨。斷最後窮源微細無明、登中道山頂、與無明父母別。是名有所斷者名有上土也。

第七妙覺地者、究竟解脫、無上仏智。故言無所斷者名無上土。此即三德不縱不横不並不別、究竟後心大涅槃也。一切大理、大誓願、大莊嚴、大智斷、大遍知、大道、大用、大權實、大利益、大無住。即是十觀成乘円極、竟在於仏。過茶無字可說。盧舍那名淨滿。一切皆滿也。

南岳師云、四十二字門是仏密語。何必不表四十二位。諸学人、執釈論無此解、多疑不用。但論本文千卷。什師九倍略之。何必無此解。深応冥會。何者。經云、初阿後茶中間四十二字門。具諸字功德。華嚴云、從初一地、具足諸地功德。此義即同。阿字門諸法初不生故。此豈非円教初住、初得無生忍。過茶無字可說。豈非妙覺無上無過。広乗品明一切法皆是摩訶演竟、即說四十二字門。豈非円菩薩、從初發心得諸法実相、具一切法、至妙覺地、窮一切法底。此義与円位、甚自分明。次発趣品明別教十地。後明三乗共十地。三教階位其文現也。

『法華玄義』卷第五上 (T33, 734a13-735a24)

二明十住位者、以從相似十信能入十住真中智也。初發心住發時、三種心發。一縁因善心發。二了因慧心發。三正因理心發。即是前境智行妙三種開發也。住者、住三德涅槃也。縁因心發、即是住不可思議解脫、首楞嚴定。慧心發、即是住摩訶般若、畢竟之空。正因心發、即是住実相法身、中道第一義。……華嚴云、初住菩薩所有功德、三世諸仏歎不能盡。……華嚴云、初發心時、便成正覺、了達諸法真實之性。所有聞法、不由他悟。……淨名云、一念知一切法。是為坐道場。成就一切智故。亦是入不二法門、得無生忍也。大品明、從初發心即坐道場、転法輪度衆生。當知、此菩薩為如仏、亦是阿字門、所謂一切法初不生也。……

三明十行位者、即是從十住後、実相真明不可思議。更十番智斷破十品無明。一行一切行、念念進趣、流入平等法界海、諸波羅蜜任運生長。自行化他功德與虛空等、故名十行位也。

十廻向位者、即是十行之後、無功用道、不可思議、真明念念開發、一切法界願行事理、自然和融、廻入平等法界海。更証十番智斷、破十品無明、故名廻向也。

十地位者、即是無漏真明、入無功用道。猶如大地、能生一切仏法、荷負法界衆生、普入三世仏地。又証十番智斷、破十品無明、故名十地位也。

等覺地者、觀達無始無明源底、辺際智満、畢竟清淨。斷最後窮源微細無明、登中道山頂、与無明父母別。是名有所斷者名有上土也。

七明妙覺地者、究竟解脫、無上仏智。故言無所斷者名無上土。此即三德不縱不横、究竟後心大涅槃也。一切大、理大、誓願大、莊嚴大、智斷大、遍知大、道大、用大、權実大、利益大、無住大。即是前十觀成乘円極、竟在於仏。過茶無字可説〔云云〕。故盧舍那仏名為淨満。一切皆満也。……

南岳師云、此是諸仏密語。何必不表四十二位。諸学人、執釈論、云無此解、多疑不用。但論本文千卷。什師作九倍略之。何必無此解耶。今謂此解深応冥会。何者。經云、初阿後茶中、有四土。初阿字門、具四十一字。後茶亦爾。華嚴云、從初一地、具足一切諸地功德。此義即同。經云、若聞阿字門、則解一切義。所謂諸法初不生故。此豈非円教初住、初得無生法忍。過茶無字可説。豈非妙覺無上無過。広乗品明一切法皆是摩訶衍竟、即説四十二字門。豈非円教菩薩、從初發心得諸法実相、具一切仏法、故名阿字、至妙覺地、窮一切法底、故名茶字。此義、其数与円位、甚自分明。

智顗疏は『法華玄義』とほぼ一致し、独自の説は見られない。五品弟子や十信において述べられていた十乗觀法の解釈は、十住以降には見られないものの、妙覺において挙げられた十大は十乗觀法が仏において極まったものとしている。なお、智顗疏は大正蔵に従えば「大理、大誓願……」となり各語に「大」を冠しているが、おおもとの『法華玄義』や『輔行』³⁸は「理大、誓願大……」であるため、智顗疏の第十「無住」の後に「大」が欠けている可能性がある。

明曠疏は十行・十廻向・等覺に触れない。初住に入つて八相を完全に成就し、それが『華嚴經』に弁じている通りと述べている。この解釈も智顗疏ではない智顗の説に基づくと考えられる。『法華玄義』の述門の十妙の「眷属妙」を述べた箇所において、円教の法門に眷属を明らかにするとして、初住においてすぐに正しい覺りを成就する（便成正覺）としている³⁹。この表現に基づけば、先に挙げた『法華玄義』および智顗疏の初住において記されている『華嚴經』の文「初發心時、便成正覺」⁴⁰に関連するといえよう。また明曠疏は、円教の初住と別教の初地が等しいという対応を示している。上根であれば一生のうちに初住に入るという説に関しては、『法華玄義』において四教の階位を述べた後に説かれているが機根は論じておらず⁴¹、湛然の説に見られる⁴²。

³⁸ 『輔行』卷第七之四、「十法至此、方受大名。謂理大、願大、莊嚴大、智斷大、遍知大、道大、用大、權実大、利益大、無住大。次第以対十法成乗。釈名対義、亦応可解」(T46, 385c8-11)。

³⁹ 『法華玄義』卷第六下、「若円教法門明眷属、自行三諦一諦為実……初住之中、便成正覺、能八相化物、即是導師」(T33, 757c14-21)。

⁴⁰ 仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』(六十華嚴)卷第八、梵行品「初發心時、便成正覺、知一切法真実之性、具足慧身、不由他悟」(T9, 449c14-15)。

⁴¹ 『法華玄義』卷第五下、「円信円行、不由歴別、於一生中、即入初住、得見仏性」(T33, 739c29-740a1)。

⁴² 『止観大意』「上根一觀横堅該摂、便識無相衆相宛然、即破無明登於初住」(T46, 460b17-19)。

6. 四教と五時

明曠疏においてはその後、四教と五時との関係を次のように述べている。

此之四教、約於五時、有多有少。華嚴円教兼別。鹿苑但一三藏。方等対半明満、四教具足。諸部般若帶半明満、通別円三。今此戒經結華嚴会、即別円教。輕重頓制菩薩律儀。法華正明仏意、卷権帰実、唯一円乗。……今從仏意、円教消釈。(T40, 581c11-20)

この四教は、五時に焦点を合わせれば、多いものもあり少ないものもある。華嚴[時]は円教に別教を兼ねる。鹿苑[時]はただ一つ三藏教のみである。方等[時]は半教に対して満教を明らかにし、四教が具足している。さまざまな般若[経]は半教を帯びて満教を明らかにし、通・別・円の三教がそなわっている。いまこの戒經(『梵網經』)は華嚴の会[座]を結ぶので、別・円[の二教]である。輕重(十重四十八輕戒)はただちに定めた菩薩の律儀である。法華[経]はまさしく仏意を明らかにしており、権教をまとめて実教に帰着させ、ただ一つ円の教えのみである。……いま仏意に従って、円教によって解釈する。

『法華經』の円教の立場から『梵網經』を注釈するという態度を明らかにした箇所であり、教判の考えが示されている。五時に対して四教の多少を論じるのは『四教義』⁴³などにあり、またあえて細かな表現に着目すれば華嚴時を「兼別」と表記するのは『法華玄義釈籤』⁴⁴、方等の「対半明満」や般若の「帶半明満」との表記は『法華玄義』や『法華文句』⁴⁵にあるように、これらの解釈は智顗や湛然の影響のもとにある⁴⁶。前述の通り、『梵網經』が華嚴の教えを結ぶものであり、別教・円教にわたるという認識は智顗の説を継承するものの、ここに、もっぱら円教によって注釈するという態度の表明は、智顗疏との明らかな差異であり、師湛然の影響である可能性がある。また教判という点において、「五時八教」の語は湛然に始まるとされるが⁴⁷、明曠疏に化儀の四教は現れない。なお、智顗疏には五時や化儀の四教はまとまって現れることがない。

⁴³ 『四教義』卷第一、「第五明經論用四教多少不同。若華嚴頓教用別円兩教。若漸教之初小乘經但用三藏教。若大乘方等則具有四教。若摩訶般若用通別円三教。妙法蓮華經但用円教。大涅槃名諸仏法界、四教皆入仏性涅槃。諸論隨經用教多少義類可解」(T46, 725a21-26)、同卷第十二、「第六辨衆經明四教位多少不同者、華嚴頓教但明別円二教位。漸教之初聲聞經但明三藏教三乘之位。若方等大乘具用四教明位。摩訶般若但明通別円三教之位。若法華經但明円教一仏乘開示悟入之位」(T46, 765c26-766a2)。

⁴⁴ 『法華玄義釈籤』卷第十九、「次文者、一往雖然、所請之法、所被機緣、不無同異。華嚴兼別、法華純円」(T33, 950c18-20)。

⁴⁵ 『法華玄義』卷第十下、「若約二法論開合者、約半満兩教。初明華嚴之満。若衆生無機、次約満開半。次方等対半明満。次般若帶半明満。次法華捨半明満。始則從満開半、終則廢半帰満〔云云〕」(T33, 811a1-5)、『法華文句』卷第七下、「初十六子請轉満教、如今仏説華嚴。東東南二方請轉半教、如今仏説三藏。後七方請轉対半明満、如今仏説方等。上方梵請帶半明満、如今仏説般若。後十六子請廢半明満、如今仏説法華醍醐教也」(T34, 98c21-26)。

⁴⁶ 池田(1975a, 45-51)は、明曠の撰述と考えられる『天台八教大意』と明曠疏を比較して、共通する様相を指摘している。『天台八教大意』「次明藏通別円四教。亦遍頓漸二味之中。華嚴頓部、円教兼別。鹿苑初成、十二年前、説戒定慧、三並属小、但三藏教。十二年後、般若之前、大集、宝積、楞伽、思益、淨名、金光明、除般若外、並属方等、対半明満、具有四教。諸部般若、帶半明満、具通別円、無三藏教。法華会竟、無三唯一円教。涅槃最後、談常四教、並知円理。所以二經同醍醐味」(T46, 769b17-24)。

⁴⁷ 池田 1975b ほか。

Ⅲ. 結語

化法の四教を論じる点において共通する智顗疏「階位」と明曠疏「教撰」との比較・検討を通して、明曠疏の「教撰」は智顗疏を継承していないことが明らかとなった。智顗疏と比較して明曠疏に見られた特徴としては、第一に、五時説と共に化法の四教の教判を明らかにした上で、仏意を明らかにした『法華経』に基づき、円教によって『梵網経』を注釈するという態度を表明していること、第二に、化法の四教の解釈のいずれにおいても断伏する煩悩を示していること、第三に、階位において円教と別教・通教、通教と藏教といった四教間の対応を示すことに留意していること、第四に、藏教や通教において菩薩の律儀は声聞の律儀と同じであり、また布薩も同じであることなどを明らかにして、菩薩の修行実践の面に関心を示していること、などが挙げられよう。これらの明曠疏の説は、おおむね智顗や湛然の諸著作に基づいているものである。一方、智顗疏は大半が『法華文句』や『法華玄義』を依用しており、一部において慧遠の説も参照している。以上のような両疏の差異は、天台の教判と行位には密接な関係があり⁴⁸、同じく化法の四教を論じていても智顗疏は階位、明曠疏は教判という関心の相違があることによって生じたものと考えられよう。明曠疏の階位説は、『梵網経』の階位に対する随文解釈において論じられているため、別の機会において智顗疏の円教の階位説と共に検討したい。

参考文献

- 池田魯参 1975a 「湛然以後における五時八教論の展開」『駒沢大学仏教学部論集』6: 38-60
- 池田魯参 1975b 「湛然に成立する五時八教論」『印度学仏教学研究』24(1): 268-271
- 大津健一 2019 「明曠についての基礎的研究——事績ならびに『天台菩薩戒疏』を中心に——」『創価大学人文論集』31: 87-113
- 大津健一 2020 「明曠『天台菩薩戒疏』の七門分別ならびに「釈名」について——智顗『菩薩戒義疏』との比較を中心に——」『創価大学人文論集』32: 25-47
- 塩入良道 1961 「化法四教に於ける行位の問題」『天台学報』3: 48-54
- 塩入良道 1968 「天台行位説形成に関する諸問題(1)——藏教と通教について——」『大正大学研究紀要』54: 25-52
- 水野弘元 1984 「五十二位等の菩薩階位説」『仏教学』18: 1-28
- 村上明也 2009 「『菩薩戒義疏』の天台大師説を疑う」『印度学仏教学研究』57(2): 790-793
- 村上明也 2017 「智顗説灌頂記『菩薩戒義疏』の成立に関する研究」『法華仏教研究』25: 106-156

⁴⁸ 塩入 1961, 同 1968。